

ステークホルダーとともに 企業価値の向上を目指すSBIグループ



アセットマネジメントOne(株)
株式運用グループ アナリスト

伊勢 和正 氏

2016年、DIAMアセットマネジメント、みずほ信託銀行の資産運用部門、みずほ投信投資顧問、新光投信が統合して発足した資産運用会社。アジア最大級の運用資産残高を有する。

「不易流行」による 強靱な企業体質の構築に期待

SBIグループに対しては、SBI証券の顧客基盤を武器に隣接の事業領域へ展開し、ベンチャーキャピタルを含む他事業との相乗効果を追求するグループ戦略に魅力を感じています。

投資先企業の分析において私が重視しているのは、「企業の打ち手」です。いかに美しい企業理念や合理的なグループ戦略を掲げても、適切な打ち手が講じられなければ業績向上はあり得ません。SBIグループとはトップミーティングや個別取材など多くの接点を持たせていただけていますが、各事業における取り組みや成果などの情報を積極的に開示されており、大変参考になります。しかし、事業内容が多岐にわたり変化も速いため、グループの全体像を把握するのが容易ではなく、開示の分かりやすさが向上するのと感じます。

また、SBIグループの過去5年の平均ROE^{※1}は10.8%と市場平均の8.1%^{※2}を上回っており、資本効率は高い水準にあると考えています。しかし、時系列で分析すると、過去数年にわたり財務レバレッジが上昇基調にあり、昨今の社会・経済環境の不透明さを考慮すると、当面はバランスシートの拡大を抑制し、ROIや売上高利益率改善を目指す局面ではないかと考えます。

常に変わらない価値を維持しつつ、新たなものを取り入れて変化を重ねることを表す「不易流行」という言葉がありますが、SBIグループはこの言葉のように、「顧客中心主義」というコアの価値を保ちつつ、変化に対して柔軟に自らを変え、強靱な企業体質を作り上げていける会社と期待しています。

※1 SBIホールディングスの公表資料から単純平均にて算出、分母は親会社所有者帰属持分の期首・期末平均

※2 TOPIX構成銘柄のROE、Bloombergの公表資料から算出



シュローダー・インベストメント・
マネジメント(株)
日本株式アナリスト

藪谷 和子 氏

英国を本拠に200年以上の歴史を持つ資産運用会社の日本法人。日本株については長期保有をベースに、中長期的な成長性を見極めながら投資を行っている。

社会課題の解決の面からも 注目している「地方創生」

SBIグループに関しては、インターネットの活用を核に証券・銀行・保険と上手にサービスの多角化を図ってきたこと、また顧客をしっかりと理解した上で、安価かつ安定した金融インフラを提供し続けていることを高く評価しています。

シュローダー・グループでは、英国本社を中心に20年以上前からESGを企業価値評価、投資判断に用いる運用手法を採用しています。

金融セクターの企業を評価するにあたっては、重要性(マテリアリティ)の観点から社会(S)やガバナンス(G)の面でどのように差別化が図られているかという点を重視しています。その中でSBIグループの近年の取り組みとして注目しているのが「地方創生」への取り組みです。私は国内の地方銀行も担当しており、地方創生を通じ、閉塞感が漂う地域金融機関の収益力回復や再生にSBIグループがいかに貢献していくのか大きな期待を持っています。取り組みの中で成功例を2つ3つと出すことができれば、全国の「地銀改革」へと波及する可能性があります。地域金融機関や地方経済の成長を助け、それをSBIグループの成長にもつなげることを投資家は非常に期待していますし、社会的な意義も大きいです。

ガバナンスに関しては、北尾社長はもとより、創業期から支えている取締役がグループ各社を牽引しているので安心感がありますが、今後の事業拡大や後継者のことを考えると、各事業の経営戦略を担当取締役が発信する場を増やすことで、信頼感が一層醸成できるものと思います。